

宗 像

大穂町町口 I

宗像市文化財調査報告書

第 13 集

1983

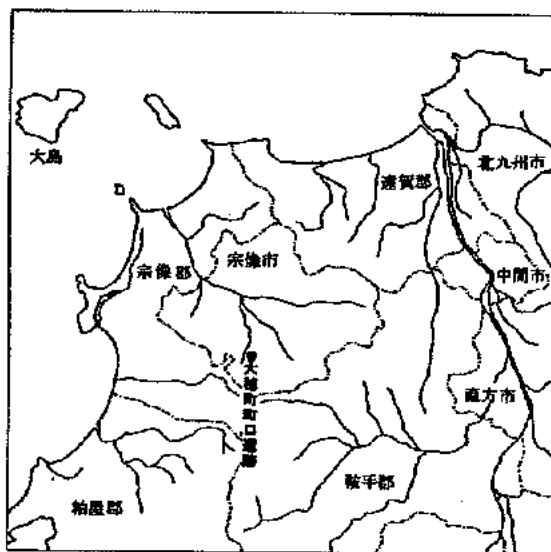
宗像市教育委員会

宗 像

大穂町町口 I

宗像市文化財調査報告書

第 13 集



1983

宗像市教育委員会

序 文

本書は、今年度中に発掘調査を実施した壘園造成に伴う発掘調査の成果を収めております。

本書が、広く文化財保護及び学術研究に貢献することを念願いたしますとともに、発掘調査全般にわたってご協力をいただいた多くの方々から感謝の意を表する次第であります。

昭和 58 年 3 月 31 日

宗像市教育委員会

教育長 竹 原 瑛

例 言

1. 本書は壘園造成にともない、1982年度に実施した宗像市内遺跡の埋蔵文化財発掘調査報告である。
2. 発掘調査は日本地所株式会社の委託を受けて、宗像市教育委員会が実施した。
3. 発掘調査において、福岡県教育委員会文化課の応援・指導を得た。
4. 本書に使用した図の作成・製図は、主に宮小路賀宏、柳田康雄、原俊一があたった。
5. 本書に使用した写真は宮小路、原による。
6. 本書の執筆・編集は原が行った。
7. 本書の題字は、城月かよ子による。
8. 遺物の整理にあたっては、次のとおり記号化した。

大徳町町口遺跡→OMM

本文目次

	本文頁
第 1 章 はじめに	1
第 2 章 位置と環境	2
第 3 章 発掘調査の概要	3
第 4 章 発掘調査の記録	6
第 5 章 おわりに	18

挿 図 目 次

	本文頁
第 1 図 周辺遺跡 (1/50000)	2
第 2 図 調査区と遺構の名称	3
第 3 図 地形測量図 (日本地所測量) (1/1000)	4
第 4 図 遺構配置図 (1/500)	5
第 5 図 1号墳地山整形図 (1/200)	6
第 6 図 1号墳主体部実測図 (1/60)	7
第 7 図 1号墳主体部閉塞図 (1/60)	8
第 8 図 2号墳地山整形図 (1/200)	9
第 9 図 2号墳主体部実測図 (1/60)	10
第10図 3号墳地山整形図 (1/200)	11
第11図 3号墳主体部実測図 (1/60)	12
第12図 4号墳地山整形図 (1/200)	14
第13図 4号墳主体部実測図 (1/60)	15
第14図 4号墳主体部閉塞図 (1/60)	16
第15図 5号墳地山整形図 (1/200)	17
第16図 5号墳主体部実測図 (1/60)	18

第1章 はじめに

1982年2月、宗像市光岡長尾遺跡の発掘調査中に、市内大穂町所在の正覚寺地内墓地を範囲として造成したい旨の計画が当市に持ち込まれた。現地は福岡県文化財等遺跡番号330405として古墳の所在する周知の遺跡であった。

現地踏査の結果、事業地内には、さらに2基の古墳が認められた。このため、計画変更による現状保存が不可能となった協議経過を踏まえたのち、諸手続き完了後の1982年6月22日に発掘調査に着手し、同年9月6日に完了した。調査後、整理作業に入った。発掘調査は次の組織で行った。

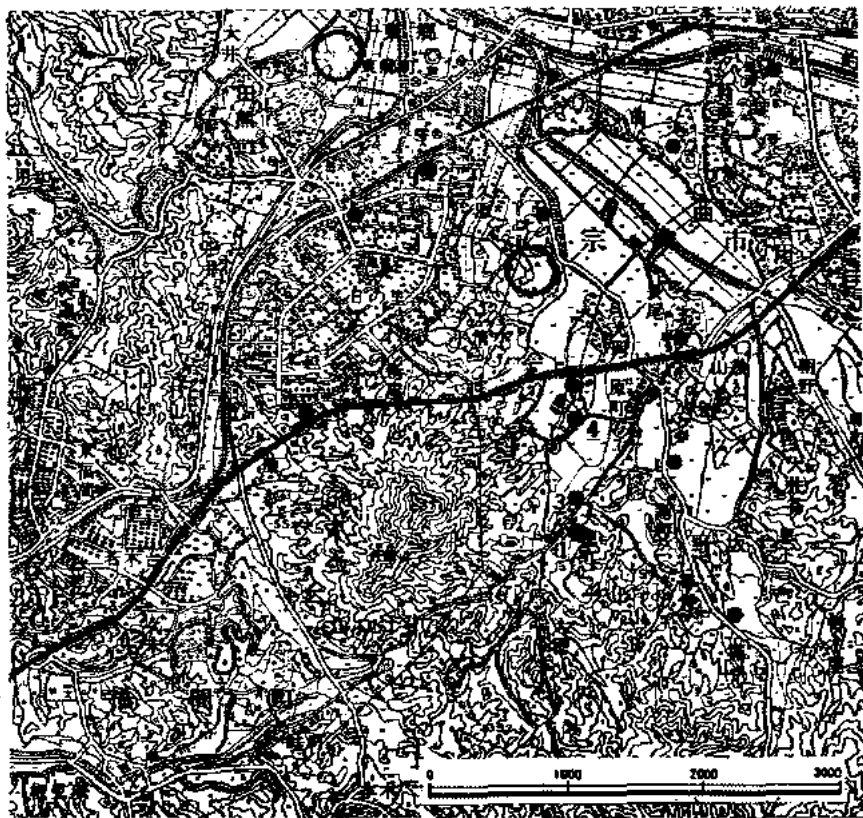
		組	織
総 括	宗像市教育委員会	教 育 長	竹原 瑛
		教 育 部 長	白木 国明
		社会教育課長	牧田 俊次
		社会教育係長	竹村 功
		社会教育主事	立石 実
		庶務・会計	主 事
発 掘 調 査	福岡県教育委員会文化課	調 査 係 長	宮小路賀宏
		主 査	柳田 康雄
	宗像市教育委員会	主 事	原 俊一

発掘調査の過程において、構野亮司、前田修（福岡大学）、福田裕士、平河力、川上正樹、新山了一（福岡教育大学）、赤司善彦君の参加を得、また、日本地所株式会社、正覚寺、地元の方々の協力には心から御礼申し上げます。

第2章 位置と環境

宗像市の西南部、鞍手郡との境界は標高200m前後の山塊が東西に延びている。郡境に位置する本木山、磯辺山から派生する丘陵は北へ延びて、宗像盆地へ突き出している。この派生する丘陵が西側に開く、標高60~70m前後の丘陵尾根上に遺跡は立地する。遺跡の所在する大穂町は近世の唐津街道の通過点であった。遺跡から南へ1kmほど行くと、戦国の武将小早川隆景を祀っている宗生寺がある。遺跡のすぐ北方の丘陵上からは、ほ場整備に伴って発掘調査され、古墳3基と掘立柱建物群がでた大穂町原遺跡がある。

また、北方1kmほどの丘陵地からはほ場整備に伴って、古墳時代の住居跡群が検出された王丸河原遺跡がある。



第1図 周辺遺跡 (1/50000)

1. 大穂町町口遺跡
2. 東郷高塚
3. 大穂町原遺跡
4. 王丸河原遺跡

第3章 発掘調査の概要

発掘調査地は墓地であるために、まず、改葬後に着手することとなったが、この改葬が容易にすすまずに、日時を費やしたため調査の着手は6月になってしまった。改葬後に山林部分の伐採を行い、現況測量に入った。この測量は古墳部分の現況測にとどめ、事業区の測量は業者の作成したものを使用することにしたが、標高が絶対標高を使ってないため、地形の変化と古墳の位置がわかる程度の全体測量図となってしまった。

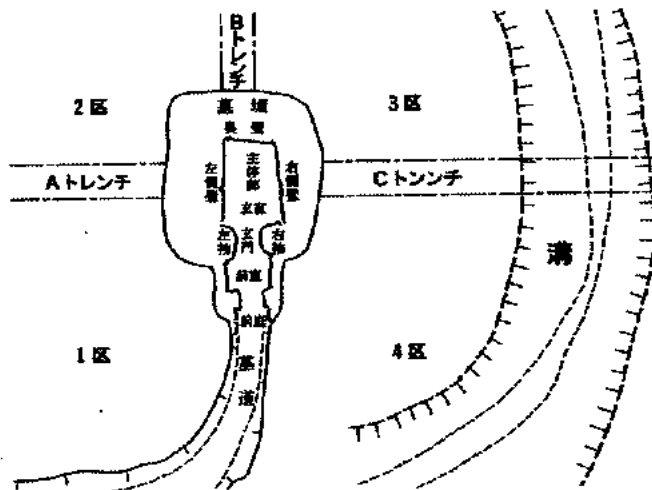
当初、3基の古墳を確認していたため、これらの現況測量後に、発掘することになった。

3基の古墳は、いずれも原型をとどめておらずに、中央が陥没しており、保存状態の悪さが目立った。まず、陥没域内の埋土除去から作業に入った。主体部の検出後に、トレンチによる墳丘調査と墓道の確認と発掘を行い、実測終了後に墳丘土を取り除いて地山整形面の調査後、写真撮影、実測をして終了した。

調査の過程において、事業地平坦面の表土除去中に新たに2基の古墳が発見されて、引き続いて調査に入ることになった。これが4・5号墳である。

なお、調査の進行中に、未改葬の墓にあたり、炎天下の悪臭の中で改葬の処理を行ったのは閉口させられた。概要は次のとおりである。

開発面積	9500㎡
事業名	霊園造成
発掘調査面積	2000㎡
遺構	古墳 5基



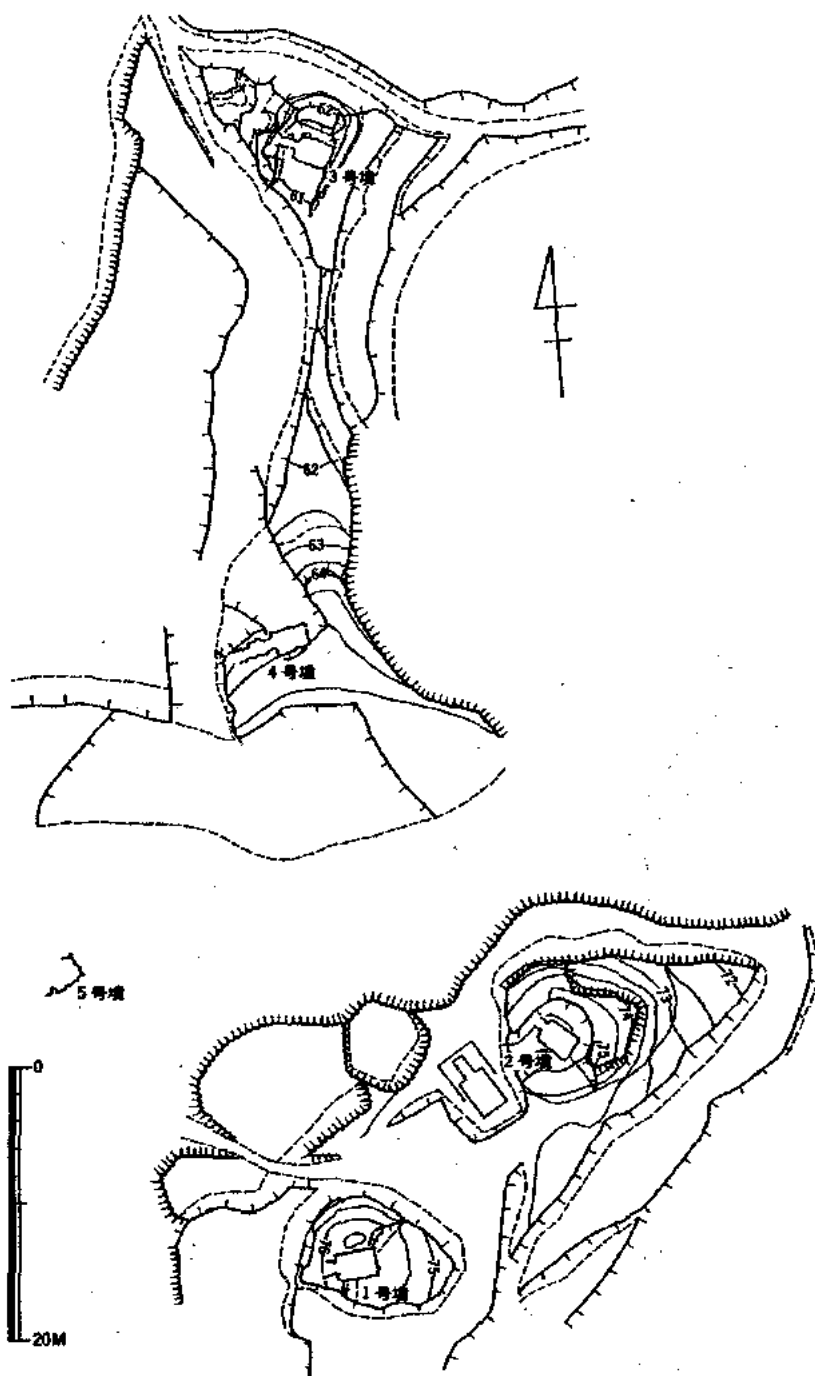
第2図 調査区と遺構の名称

大穂町町口遺跡



第3図 地形測量図(日本地所測量) (1/1000)

大穂町町口遺跡



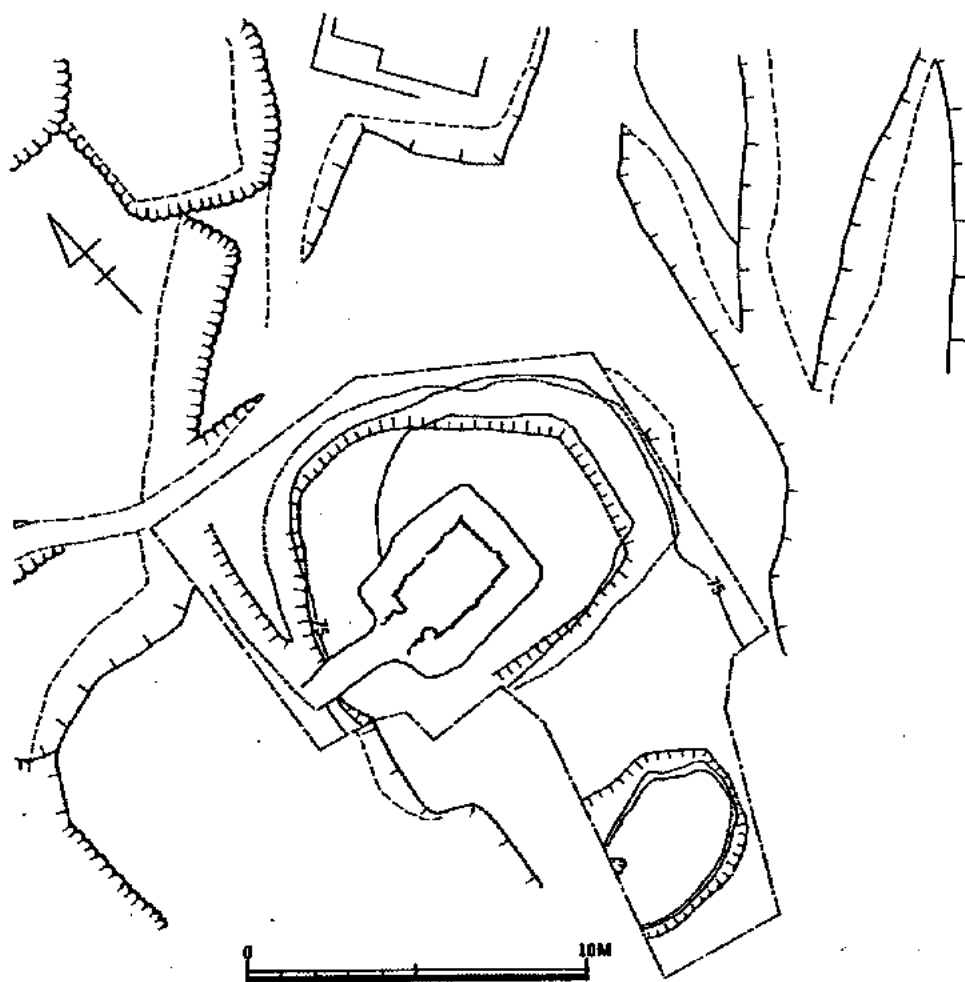
第4図 遺構配置図 (1/500)

第4章 発掘調査の記録

古墳は、最高所のものを1号墳として1～3号墳を調査した。調査中に新たに発見されたものを、順に4・5号墳とした。

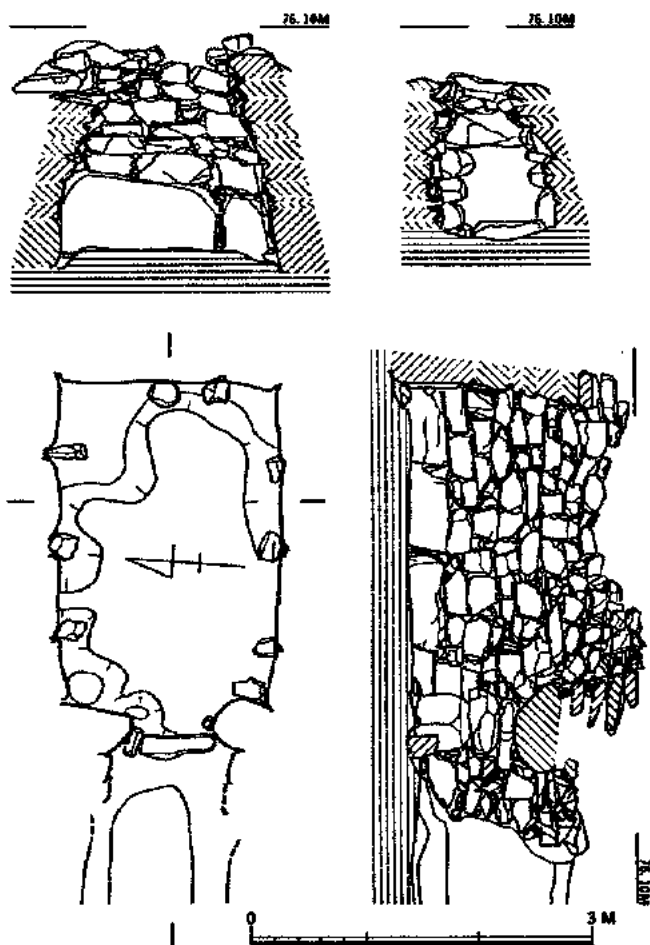
1. 1号墳

調査地最南部の最高所に位置し墳丘標高77mを測る。墳裾の全周は段落となっており、墳丘東半が削平されていた。



第5図 1号墳地山豊形図 (1/200)

大穂町町口遺跡



第6図 1号墳主体部実測図(1/60)

墳 丘

盗掘等による攪乱と盛土流失があり主体部から北側の墳丘盛土について確認ができた。赤褐色の地山の上には灰褐色の旧表土が10cmほど堆積しており、古墳の地山整形から、築造までに一定の時間があつたものと考えられる。地山からの盛土は高さ1.7mあり、下半部は盛土の一枚が厚く上半は互層をなしている。墳丘の裾側が丁寧に盛土されている。

墓 壇

墓壇は、主体部の主軸に平行して、上面形は隅丸長方形に掘られており、東西4.9～4.6m、

南北3.7mの大きさで整っている。墓壇壁は4壁とも、ほぼ、垂直に立ち上がり、奥壁部の主体部地山床から墓壇上端まで1.6mを測る。

主体部

西に開口する、単室の横穴式石室である。玄室は長方形プランで整っており、玄門側の幅がやや狭い。腰石は3周とも大振りのものを横長に据え、腰石上も、内側へ持ち送りながら割石を横長に積み上げており、8~10段程残っている。積石の最上段が天井石の下面と考えられ、床石からの高さ2mを測る。

床面は盗掘を受けており、敷石は皆無であった。地山盤形面を追うことにより、腰石固定のための根石が検出できたが、根石は、添うように据えられていた。

玄門は、両袖をつくり、腰石は大振りな石材を縦長に据え、その上を2段積みして、楣石が架構されている。楣石上は、持ち送りをしながら7段に積み上げられている。

玄門の楣は、最狭部からやや墓道よりに、1石を横長に据え、他の1石で補充している。

前庭は、最下部に1石を置き、その上部に2~3列、高さ1.5mに積み上げている。

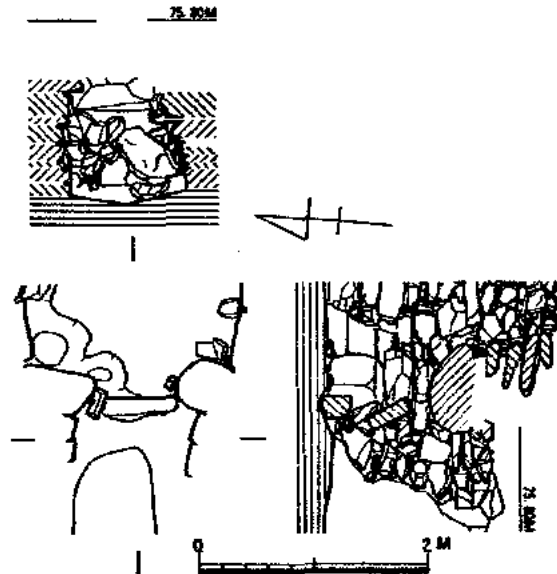
楣石上の墓道側は、転石を2段に横積みし、前庭側壁の上部と連けいすることにより、玄門部前面を補強している。

墓道

墓道は、墓壇東壁の中央から、上面幅1.3mに掘り、現存の長さ2.8m程である。横断面はU字形となり、最深部で1.3mを測る。玄室地山床と墓道床の高さは同じである。

閉塞

閉塞は、楣石からやや後方で行われ、板状の石を横長に2段、玄室に傾いて積まれ、転石で補填している。



第7図 1号墳主体部閉塞図(1/60)

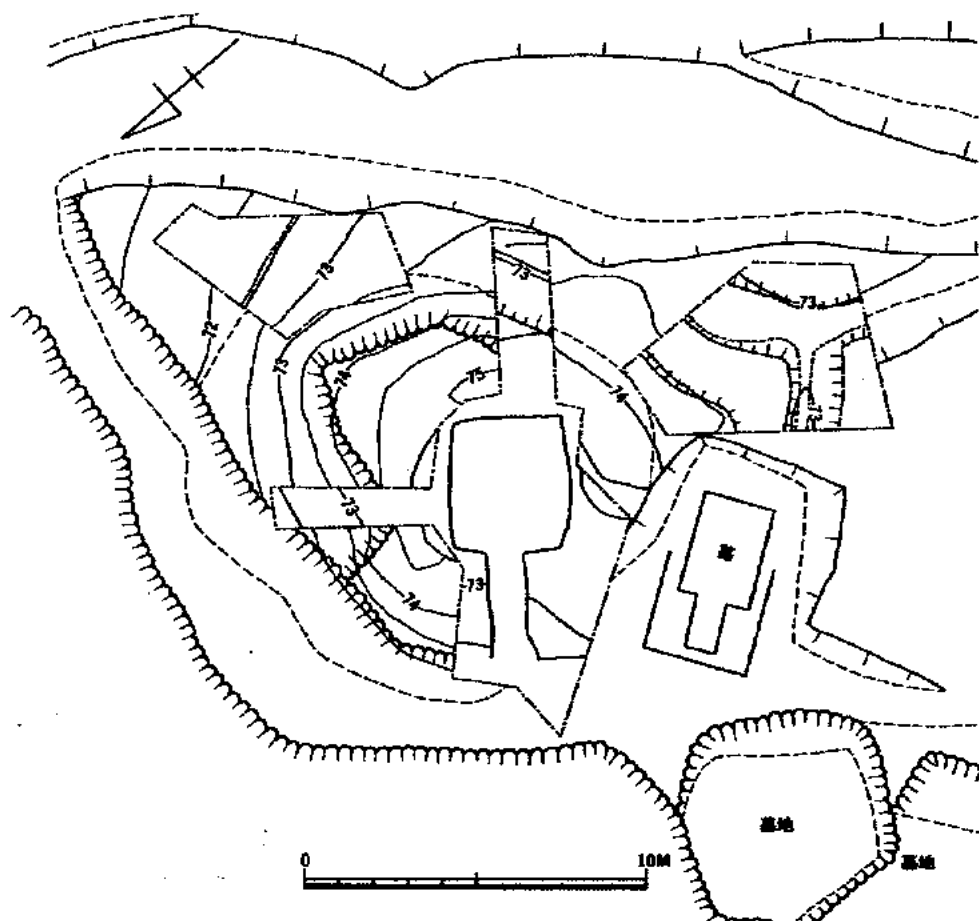
2. 2号墳

1号墳の北10mに位置し、最もみはらしのよい位置にある。古墳のすぐ東に墓があり、墳丘を削平されている。墳丘の中央が陥没している。

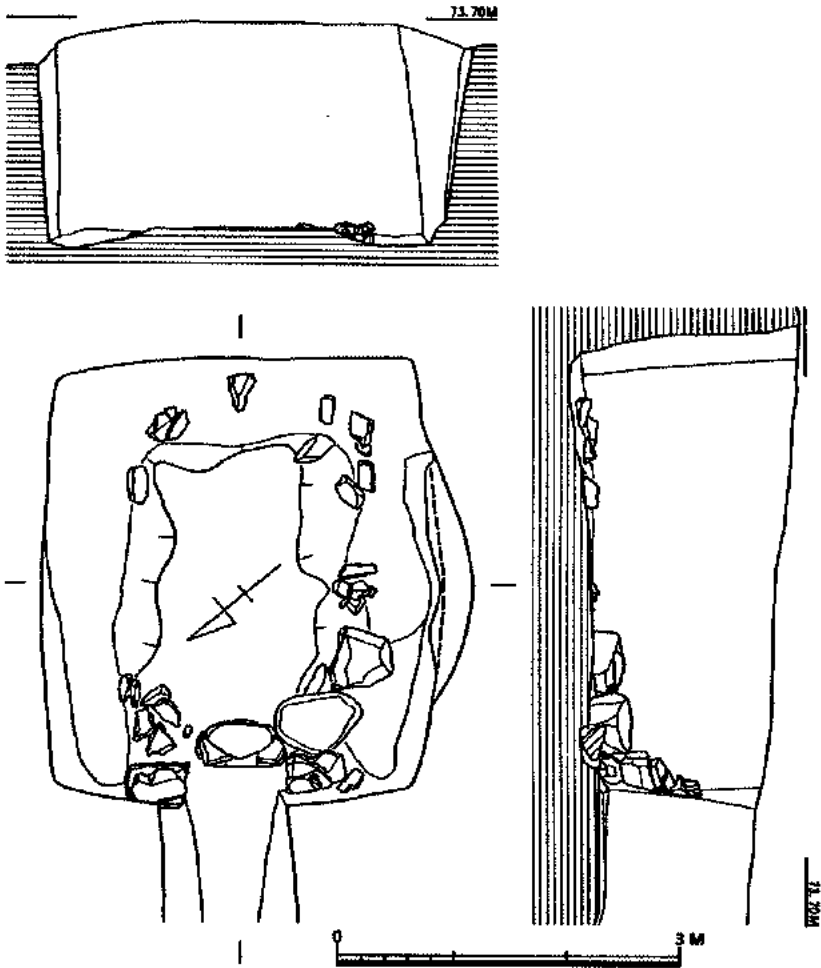
墳丘

Cトレンチでは盛土の確認はできなかった。Aトレンチでは地山上に旧表土が10cmほど堆積している。盛土は1.2mほどあり、粘質土を間に挟むようにして盛っている。

Bトレンチでは、旧表土の上に1.2mの盛土があり、Aトレンチ同様の盛り方である。旧表土の在り方は1号墳同様と考えられる。



第8図 2号墳地山整形図 (1/200)



第9図 2号墳主体部実測図 (1/60)

墓 塚

墓塚は、主体部主軸に平行して、平面形が隅丸長方形に掘られている。上面で長軸4.0m、短軸3.5mある。

墓塚壁は、ほぼ垂直に立ち上がり、床面からの高さは1.8mである。周壁の床は、腰石設置のためさらに20cmほど掘られている。

主 体 部

大徳町町口遺跡

北西に開口する、単室の横穴式石室である。内部は相当の攪乱を受けており、腰石の一部を残すのみである。地山整形面での比較から、ほぼ1号墳と同様の構造を示すものと考えられる。

玄門は両袖構造を持ち、両袖間で仕切を行い、前庭側壁は短い。

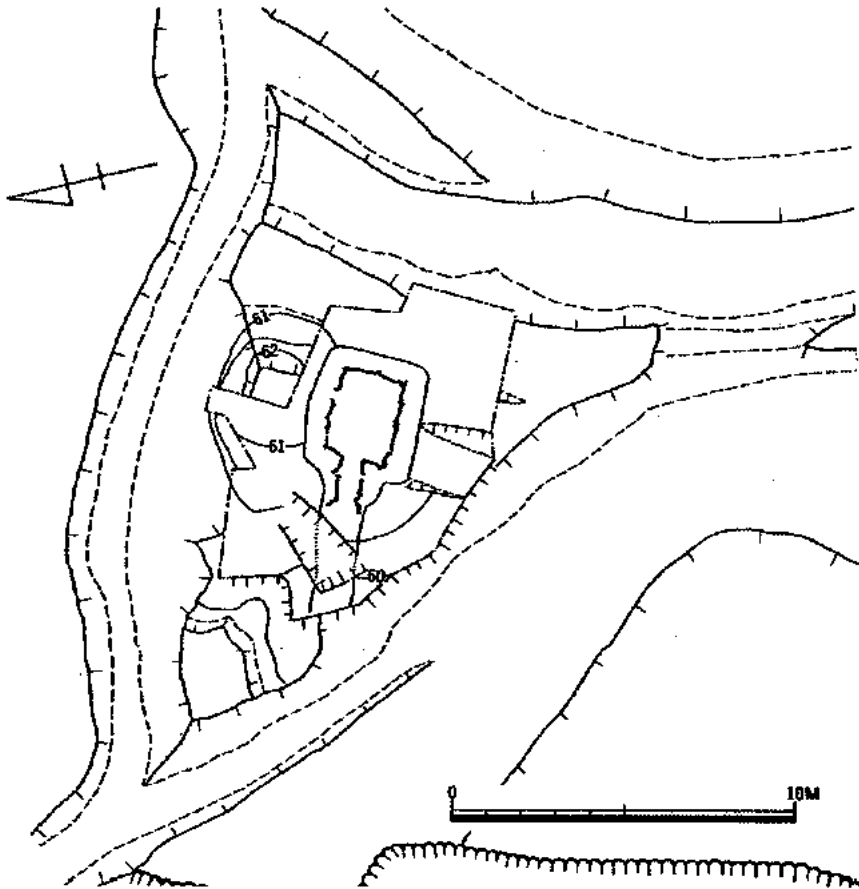
墓 道

北西壁の中央から掘られ、上面幅は1.1mある。

現存長3.2m確認である。横断面は、U字形となり、最深部は1.4mある。

閉 塞

閉塞は、^{石室}細石上で行われ、1段分の閉塞石が数個検出できた。

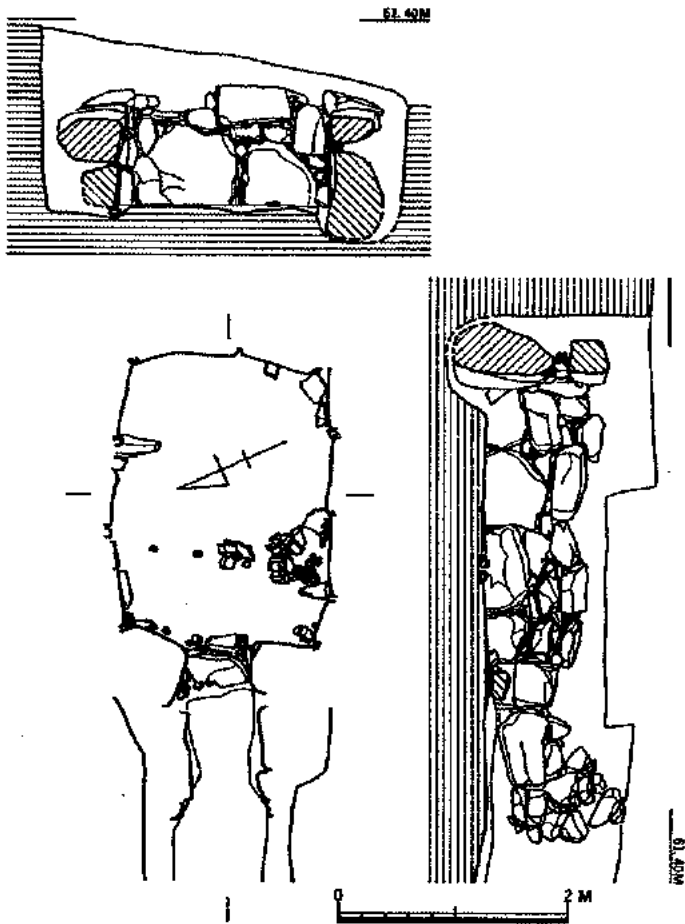


第10図 3号墳地山整形図 (1/200)

3. 3号墳

群中の最北に位置し、標高60m前後の尾根線上に立地する。切通しを挟んで、北には連続する古墳がある。

調査前は、古墳の原形を保っておらず、わずかに墳丘を遺存することで、古墳と確認できる程度であった。



第11図 3号墳主体部実測図 (1/60)

墳 丘

墳丘は北側トレンチにより、確認できるものであった。このトレンチ調査からは、赤褐色地山上に旧表土が残っており、1・2号墳と共通するものである。盛土は1m程あり、墳裾に向かって傾斜する堆積を見せている。

墓 壇

墓壇は主体部に平行して、隅丸長方形に掘られている。上面で東西3.7m、南北3.3mである。

西壁から、さらに凸状に、前庭部を取り囲むように長さ1.1m、最大幅1.8mに掘りこまれている。このような墓壇の在り方は、新しい要素であり、6世紀後半以降に顕著になってくるものである。

墓壇壁は垂直に立ち上がり、奥壁で深さ1.5mになる。地山整形面を追うことにより、床面の腰石設置の部分がさらに30cmほど、掘り込まれている。

主 体 部

主体部は攪乱を受けており、下半部を残すのみである。主体部南から盗掘墳が確認できた。北西に開口する単室の横穴式石室である。

玄室のプランは1・2号墳に類似している。腰石は、大振りの石材を横長に設置し、その上に、割石の塊石を横長に2～3段積みあげている。石材間には、小石による目貼りが見られる。床面は攪乱を受け、一部に拳大の小石が残っている。

玄門は、大振りの石材を縦長に配置し、両袖をつくる。柵は両袖間に板状の石材を1石、横長に配置している。

前庭部は袖石の内側と面をそろえており、左右2列に配している。1列の石材はやや大振りのもを横長に配置しており、2列目と上部の石材は割石塊石を2～3列に積み上げている。

墓 道

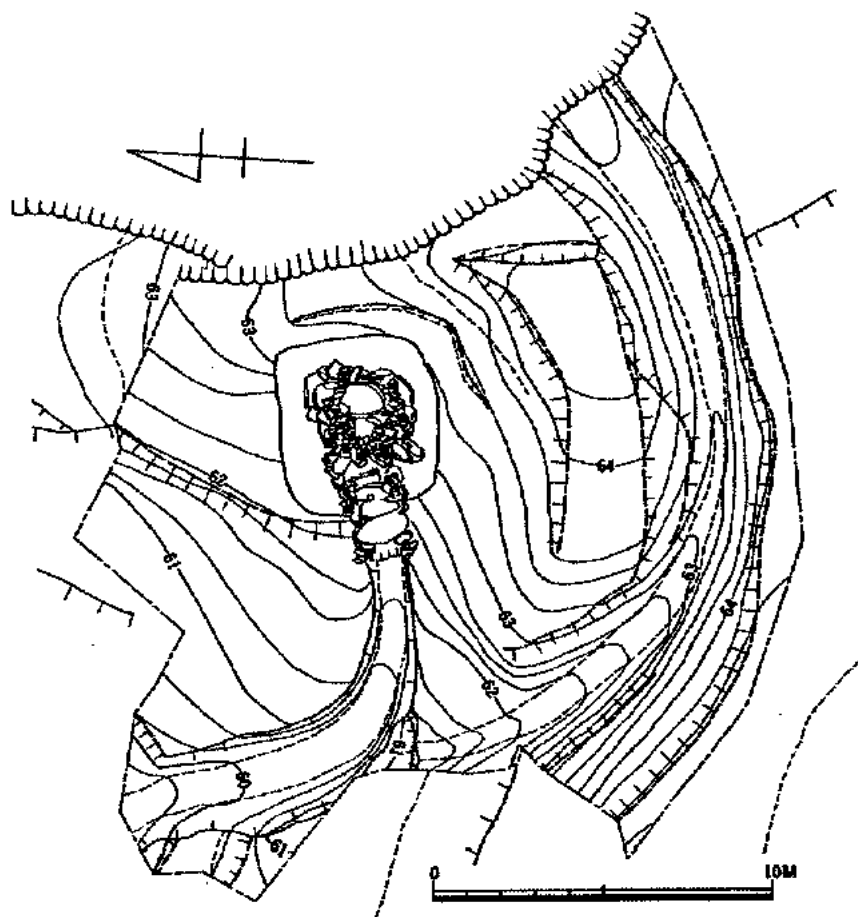
墓道は、前庭部掘り方から連続し、長さ3.2m、最大幅1.3mが残っていた。墓道の間は、自然陥没が見られた。

4. 4号墳

3号墳の南、40m程の位置の丘陵上緩斜面で、重機による表土除去中に発見された。周辺は墓地が集中しており、墓地道成で地形平坦化したものであろう。

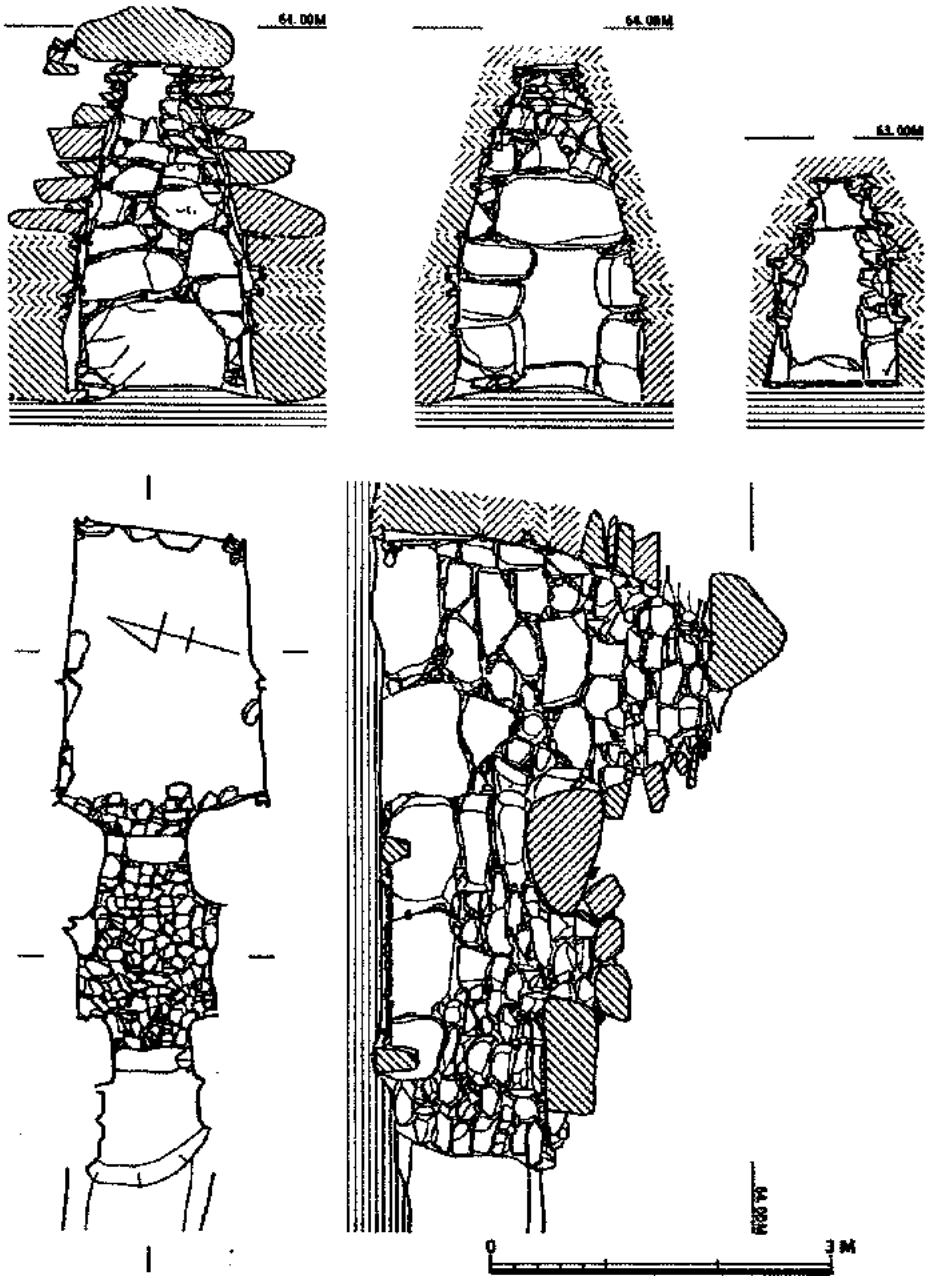
墳 丘

2本のトレンチにより、盛土が確認できた。東西トレンチでは、地山整形は長さ2.8m残っており東はガケ落ちとなっている。地山の傾斜は、中間から外側は、石室へ向かって上り、内側は、下降している。盛土は墓壙上端から1.2mほどある。全体に主体部へ下降気味の堆積状態である。



第12図 4号墳地山整形図 (1/200)

大磯町町口遺跡



第13圖 4号墳主体部実測図 (1/60)

天井石のすぐ裏側には盜掘竈が認められた。南北トレンチでは、地山整形は主体部へ向かって下降の面をつくっている。盛土は1mほど残っていた。南側では、溝が認められた。最大幅3.5 m、最深部で1 mを測る。溝中はレンズ状の堆積が見られる。

墓 道

主体部と平行して、上面で東西5.2 m、南北4.5 mに掘られている。西壁からは、さらに羨道部を取り囲むように凸状に、長さ1.5 m掘られている。墓壇壁の立ち上りは垂直で、奥壁で2.2 mの深さがある。地山整形面を追うことによって腰石設置のための掘り込みが見られた。

主 体 部

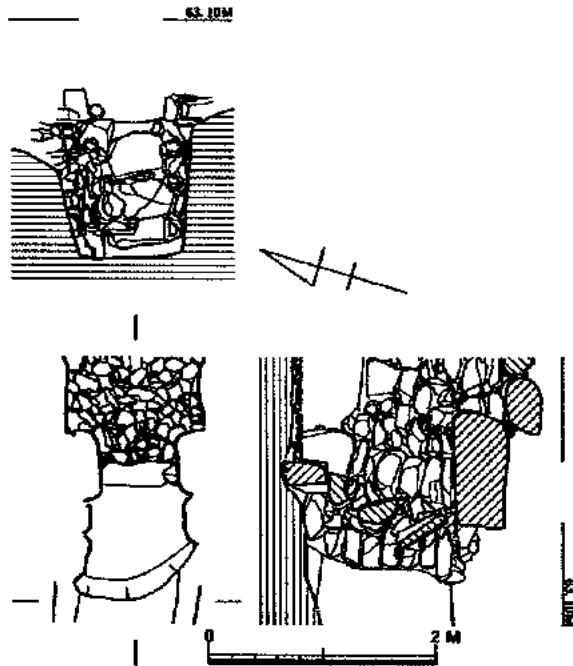
西に開口する複室の横穴式石室である。石室はよく残っていたが、奥壁の天井石直下から空掘を受けている。

玄室は長方形プランで、奥壁より玄門側の幅が大きい。腰石は左右2石ずつ、奥壁に1石大板石材を横長に配置している。腰石上には、ゆるく持ち送りながら、割石塊石を横長に配置して、9～10段に積み上げている。天井石は2石である。床面は攪乱を受けて敷石は残っていない。腰石の下部には根石が据えられ、腰石の固定を図っている。この根石の配置は3号墳とも共通する。玄室高は2.9 mである。

玄室部は大振りの石材を横長に据えて両袖をつくる。腰石上は右1石、左2石を積み上げ、その上面に榑石を架構している。榑石上には、玄室側に持ち送りながら6段積みあげて天井石に至る。榑は両袖石間で行い、2石を配している。

前室は、左右の腰石に1石ずつ配している。腰石上は6段積み上げている。床面は拳大の敷石が全面に残っている。前室の門は両袖をつくり、腰石上には右側で6段積んでいる。両袖間は2石を配して榑石としている。

前庭部は、最下部に右1石、左2石を袖石内側から少しひかえて置き、塊石を7～8段積んでいる。羨道部は有しない。



第14図 4号墳主体部閉塞図 (1/60)

墓 道

墓壇に連続してつくられ、西へのびたのち、斜面を下るように北へ曲り、調査区外へ切れる。
現存の墓道長17m、最大幅3mを測る。最深部で、1.2mある。

墓道の起点部の床と玄室床は同じ高さとなる。

墓道の延長部は丘陵にそって傾斜している。

閉 塞

閉塞は前門の掘石上で行われ、厚みのある板状石を横長に3段に積み上げて、細部を小礫で補填している。断面は玄室側に傾斜している。

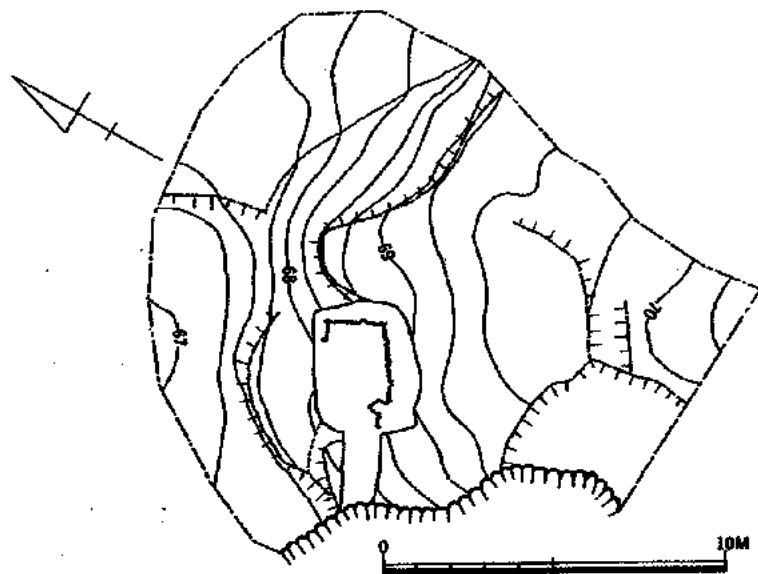
5. 5号墳

調査の最終段階で、1号墳の北西に丘陵の張出し部分の基地を試掘したところ、主体部を検出した。

墳 丘

基地であるため、墳丘盛土は全て失われている。地山整形面の調査からも、古墳の規模を測ることはできなかった。

墓 壇



第15図 5号墳地山整形図(1/200)

主体部と平行し、隅丸長方形に掘り込まれており、現況で長軸3.9m、短軸3.0mある。深さは1mほど残っている。

主体部

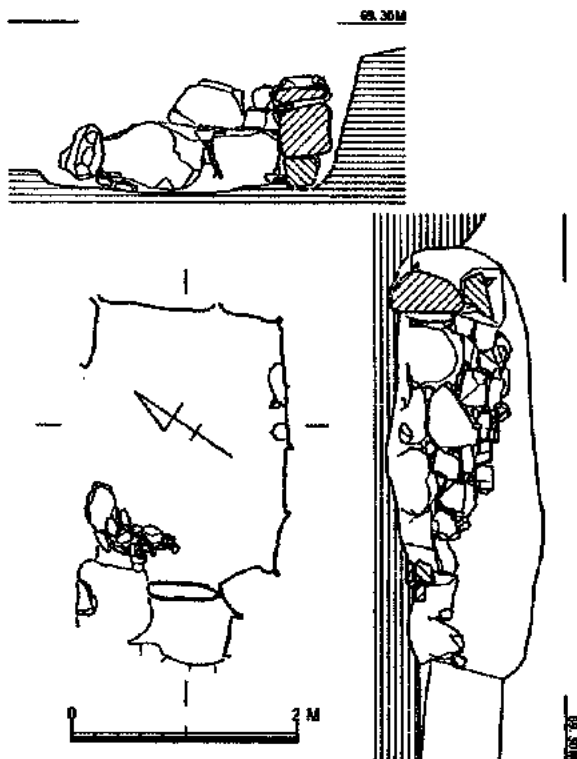
西側に開口する単室の横穴式石室である。大半が破壊を受けており、特に左側壁部は腰石まで抜かれている。プランは長方形で、腰石上には3～4段に側壁が残る。

床面の敷石はほとんどない。

玄門は両袖をつくり、玄門間に楣石を置いている。玄室の前面は前庭が1列のみ築かれている。使用石材は全て花崗岩である。

墓道

玄門の墓壇壁の中央から掘られ、直線的に約2mほどのびる。墓道床面と玄室床はほぼ同じ高さになる。



第16図 5号墳主体部実測図(1/60)

第5章 おわりに

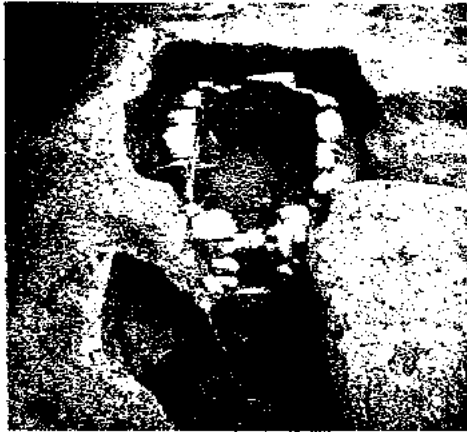
5基の古墳は、いずれも円墳である。調査区の南と北には連続する古墳が認められる。

墳丘規模を明らかにできるものは4号墳のみである。幅4mの馬蹄形溝を掘ることで古墳を区画しており、溝底で直径20mを測る。

墓壇は、主体部と平行して隅丸長方形に掘られるが、1・2号墳と3・4号墳では築造工程における変化が見られる。

主体部は1～3号墳が単室の横穴式石室、4号墳が複室の横穴式石室である。4号墳の主体部は、後道をもたない横穴式で、近年の宗像の調査で、類例を増しており、主体部の長さや墓壇の深さに原因しているものと考えられる。

大徳町町口遺跡



1号墳	2号墳
3号墳	4号墳
5号墳	

宗 像
大 穂 町 町 口 I

宗像市文化財調査報告書 第 13 集

1983年 3 月 31 日

発行 宗 像 市 教 育 委 員 会
福岡県宗像市大字東郷995番地

印刷 釜 瀬 印 刷
福岡県宗像市河東